

なぜそこまでして働くのですか。

木下 美咲

杏林大学医学部皮膚科学内講師

先日、父が亡くなった。4月にスキルス胃癌が判明、すでに腹膜転移しており、ニボルマブなどの薬物療法を続けたがその甲斐空しく、半年経たずして旅立った。

父はいわゆる仕事人間だった。エンジニアとして40年弱、同じ会社に勤め上げた。毎日ほぼ同時刻に出勤し、夜は遅く帰ってきた。いつも作業着からはオイルの匂いがした。土日にもよく出勤していて、有給を取っているのはみたことがない。退職年齢を過ぎ、補佐的な仕事に回ってからもそのスタイルは変わらなかった。癌の判明後もフルタイムで勤務を続け、平日の病院受診を嫌がった。徐々に全身状態が悪化し、歩行すら困難となり、最後に入院する直前も、仕事に行くと家を出た。母が泣いて止めても聞かなかったという。

父はなぜそこまでして働き続けたのか。私の知るかぎり、素朴で出世欲などとは無縁の人だった。父が欠けては周囲が困るような要職に就いていたわけではない。出費のかさむ趣味や返済すべき借金があったわけでもない。考えても答えはみつからない。

しかしふと、そのヒントはもっとも身近なところ、すなわち私自身の中にあるかもしれないと感じるようになった。性格は父と似ても似つかない私だが、気がつけば同じような働き方をしているのではないか。産後2カ月で常勤医として復帰し1年半、診療、後輩や学生の指導、自身の研究活動に加え、最近は依頼原稿の締切と講演準備に追われる日々だ。平日に終わられない仕事をこなすために、週末はベビーシッターに来てもらうことも多い。いまの役職に就いてからは依頼される頻度が減ったものの、当直も続けている。まとまった仕事時間を確保しにくいいまでは、むしろありがたい機会となっている。むしろ、抱える仕事の大半は誰に強いられたわけでもなく、自らの意思で受けてきたものだ。望んだ結果がいまの働き方ということなのだろう。「今日も仕事なん？ ちゃんと家のことしよる



ん?」。生前の父の働きぶりに対する母の呆れた視線は、いまは私に向けられている。職場の後輩たちには適切なロールモデルを見つけ、個々の望むワークライフバランスを実現してほしいが、自分自身は当分、いまの働き方を続けるつもりだ。

最新の世論調査によると、国民の働く目的は「お金を得るため」が51.0%と最も多く、「生きがいを見つけるため」21.3%、「社会の一員として、務めを果たすため」14.7%、「自分の才能や能力を発揮するため」8.8%と続く。私が働く理由は、そのいずれでもあるのだろうが、どれもじっくりとくるものではない。上記の目的を満たすためだけなら、もっと効率的な、語弊を恐れずいうならもっと「楽な」働き方もできると思うからだ。しかし私はそれを選んでいない。

結局、父が、そして私が働き続けた（続ける）理由はわからない。しかし何よりいまは、携帯の待ち受け画面で微笑する在りし日の父に「お父さん、今日も頑張ったよ」と伝えたい、だから一日一日を精一杯に生きたい。ただそれだけでも十分、働く理由になっている。